

子どもが描く屋外壁画制作の研究（1）

－放課後等デイサービスの壁画制作を通して－

樋口 健介 幼児教育科

（2018年10月1日受理）

〔要約〕

本研究では、多様な子どもたちが参加可能な屋外壁画制作の方法として、マスキング技法を応用した壁画制作の方法を実践した。マスキング技法による壁画制作の実践を一般的な壁画制作の方法と比較し、多様な子どもが壁画制作に参加しやすいかという点について検証することを目的とした。

結果として、マスキング技法による壁画制作のほうが一般的な壁画制作の方法よりも、制作時間が短く、色を塗る工程で描き方や色、道具の選択について制限が少なくなるため、壁画制作に参加するために求められる技術的、能力的ハードルが下がることが示された。マスキング技法による壁画制作の方法は一般的な壁画制作の方法では参加できなかった年齢が低い子どもや障がいがある子どもたちでも積極的に参加できる壁画制作の方法であると考えられる。一方で、マスキング技法による壁画は描かれた図像が不明瞭になる場合が考えられた。壁画を描く場所や依頼者の要望に応じて、壁画制作の技法を選択する必要がある。

I. 研究の背景、問題と目的

2015年に筆者は放課後等デイサービス¹⁾「Harmony」²⁾から壁画制作の依頼を受けた。依頼内容は施設外部の壁面（横幅約10m×高さ約2m）が殺風景であるため、壁画を描き明るくにぎやかな雰囲気にしたというものであった。当初は、子どもたちや施設職員から壁画デザインの要望を聞いて、実際の壁画制作は専門家のみで行う計画であった。しかし、打ち合わせを重ねると、今回の壁画制作には単に壁面を明るく飾るという目的だけではなく、「子どもたちに自分が通う施設への愛着を持ってほしい」という施設職員の願いが込められていることがわかってきた。

壁画制作を子どもたちの施設に対する愛着へつなげるには、どんな制作方法が適切だろうか。木野ら（2006）はモノへの愛着について調査し、「モノへの愛着には記憶に関わる側面が重要である」ことや「所有者が他者とその所有物に関する交流をするなかで正のフィードバックを受ければ、そのモノへの肯定的感情を強める」³⁾ことを示している。子どもたちの壁画制作への参加が図案を考えただけ、最後に少し筆を入ただけなどの限定的な関わりでは施設への愛着にはつながらないだろう。子どもたち自身が施設の壁に直接描いたという経験が不可欠であり、他者と一緒に壁画を制作することを楽しんだという気持ちが重要だと考えた。

一般的に屋外の共同制作による壁画制作（たとえば渋谷、2010；松永、2011、2014、2015、2016、2017；上浦、2013）⁴⁾は、子どもたちの参加が難しい。キャンパスなどに描かれる絵画と比較して、壁画は大きさや公共性、共同作業などを考慮し計画的に進めなければならない、制作の手順や道具などに制限が多くなるからである。作業は丹念に練られた下図を壁面に下描きとして写し取り、事前に配色された絵具を丁寧に塗っていくというあらかじめ決められた手順で進められる。各工程で制作者には専門的な技術や共同制作を行う協調性が求められる。横出・内田（2006）が共同作業による壁画制作について、「同一平面を単純に分割・分担してまとまりのある絵を描くことは、成員個々の描画力の差から困難である」⁵⁾と述べているように、専門家の共同制作であっても統一感のある壁画を制作することは容易ではない。子どもたちが制作者として屋外の壁画制作に参加することはなおさら難しく、参加する場合でも道具や描き方、色の選択などに制限が多い中で制作にならざる負えない。制限が多くなってしまう一般的な壁画制作の方法では、子どもたちは十分に壁画制作を楽しむことは難しいと考える。

そのため、本研究では多様な子どもたちが楽しんで参加することができる壁画制作の方法として、マスキング技法⁶⁾を応用した屋外壁画制作の方法を実践する。マスキング技法による壁画制作の実践を一般的な

壁画制作の方法と比較し、多様な子どもが壁画制作に参加しやすいかという点について検証することを目的とした。

Ⅱ. 実践報告

2015年5～6月に行った放課後等デイサービス「Harmony」における壁画制作について、その方法と計画、実施内容を以下に示す。

1. 方法と計画

壁画制作には、マスキング技法を応用する。事前準備としてスタッフが壁面に白い下地を作り、専門家がマスキングテープで図像を描く。その上から子どもたちがランダムに絵具を塗る作業を行う。絵具が乾いたところでマスキングテープをはがすと事前に描いた図像が浮き出てくる手順である。

事前に施設職員と複数回、打ち合わせを行い、活動の目的やスケジュールの確認、子どもたちの動きへの対応、保護者への連絡などについて確認した。

2. 壁画制作の実施内容

1) 壁画下地作り

場所：Harmony

日程：2015年5月6日（水） 14:00～16:00



図1 施設の側面



図2 施設の正面

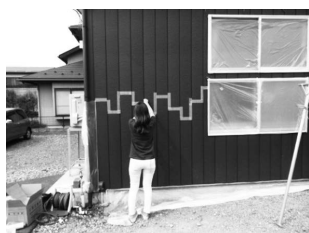


図3 養生作業とマスキング



図4 下地材の塗布



図5 下地材の塗布



図6 下地の完成

下地作りについては下地材を乾燥させるために、活動日より前に作業の日程を設けた。下地作りは筆者と施設職員のみで行い、子どもたちは参加しなかった。図1、図2は下地を塗る前の施設壁面である。壁面はもともと茶色の塗料が塗られている状態で凹凸がある。そのため、細かい描写は難しく繊細な表現はできないが、凹凸を活かした壁画ならではの表現が可能だと考えた。壁面の下部や窓には養生を行い（図3）、水性の下地用塗料で下地を作った（図4、5）。「Harmony」という施設名から音楽をイメージし、壁画からリズムが生まれることをねらい、壁画の上部を水平にそろえず段差をつけて、下地を完成させた（図6）。

2) 子どもたちとの壁画制作の実践

場所：放課後デイサービス「Harmony」

参加者：17名（Harmony天童、Harmonyの利用児）、その他約10名（支援学校教諭、他施設職員、近所の子供たちなど）

スタッフ：約20名（施設職員、天童アートロードメンバー7）、学生ボランティア）

日程：2015年6月6日（土）9:30～14:00

9:30～10:30 準備、マスキングテープで描く

10:30～11:30 壁画制作（Harmony天童の利用児）

11:30～12:30 休憩

12:30～13:30 壁画制作（Harmonyの利用児）

13:30～14:30 片付け

① マスキングテープで図像や施設名を描く



図7 マスキングテープで描く 図8 マスキングテープで施設名を縁取る

下地の上にテープで図像や施設名の縁取りをマスキングする（図7、図8）。施設名を配置することはあらかじめ計画していた。図像はスタッフが即興でマスキングテープを使い描いた。マスキングテープと壁面に隙間があると、絵具が入りこんで線がつぶれてしまうため、テープはしっかりと密着させる。隙間がある場合は木工用ボンドなどで隙間を埋めるとその心配はない。

②絵具を塗る



図9 絵具を塗る道具



図10 ローラーの使い方を示す



図11 ローラーで色を塗る



図12 壁面にスタンプをする



図13 指で描く



図14 施設職員の服へローラーする

バットに用意した絵具をローラーや梱包材を使ったスタンプ(図9)で壁面に塗る。子どもたちには、まず絵具を塗る方法を簡単に示した(図10)。言葉で伝えるよりも、これから行うことを視覚的に示す方が伝わりやすい。子どもたちはそれぞれが使いたい道具や指で自由に色を塗っていく(図11、12、13)。大きな壁に全身を使い、自由に絵具を塗る行為はそれだけで楽しい。子どもたちは絵具の質感や色の混色を楽しみながら、あっという間に壁面が絵具で埋めていった。

壁画には施設の楽しい雰囲気が伝わるように明度の高いパステルカラーの色彩を採用した。事前に混色した絵具を用意し、作業がスムーズに行えるようにした。子どもたちがランダムに絵具を塗ることになるので、明度が高めの色彩で統一することで、原色がぶつかり壁画がきつい印象になることは避けた。子どもたち一人ひとりの行為の痕跡が壁面へ残ることで、子どもたちの楽しい姿が想起できることをねらった。

服の汚れへの対応として、子どもたちはレインコートを着用した。スタッフは私服で参加しており、子どもたちからローラーやスタンプで絵具をつけられる場面(図14)が見られた。事前にある程度は想定してい

たため、子どもたちとのコミュニケーションとして楽しむことができたのではないかと考える。

③マスキングテープをはがす



図15 マスキングテープをはがす



図16 図像が浮かび上がる

絵具が乾燥したら、事前に貼ったマスキングテープをはがしていく(図15、16)。文字や図像が白い縁取りで浮かび上がってくると子どもたちから驚きの声が上がった。絵具に埋もれたテープを指先で絵具をカリカリと削りながら探す作業は大変だが、宝探しのように楽しい。

④壁画の完成



図17 壁画の細部



図18 施設の正面の壁画(完成図)



図19 施設の側面の壁画(完成図)



図20 施設の側面の壁画(完成図)



図21 完成時のスタッフと施設利用児

壁画の細部には子どもたちの手形や指で描いた落書き、スタンプやローラーが動いた無数の痕跡が残る(図17)。壁から少し距離をとり、壁画全体を見ると事前にマスキングテープで描いた施設名(図18)や動物などの図像(図19、20)が浮かび上がる。屋外で行う壁画制作は室内での絵画制作と比較すると、規模が大きくなり、様々な人の協力が必要になる(図21)。人手を集め、意思疎通をはかる事前準備が重要である。

⑤天童市美術館での活動紹介



図22 天童市美術館でのパネル展示

壁画制作の取り組みをパネルにまとめ、子どもたちの造形物と一緒に天童市美術館に展示した(図22)⁸⁾。少しでも多くの人に取り組みを知ってもらうことが施設や利用児へ理解に繋がればと考えた。

Ⅲ. 子どもが描く屋外壁画制作の方法についての考察

一般的な壁画制作の方法とマスキング技法を応用した壁画制作の方法を比較し、多様な子どもが参加しやすいかという点から考察を進め、図23のようにまとめた。

1. 下地材を塗る工程について

壁画を描くための下地作りについては、マスキング技法による壁画制作と一般的な壁画制作の方法は基本的に同様で、絵具の発色や定着が良くなる下地材が塗布される。ただし、マスキング技法の場合は完成した壁画に下地の色がそのまま活かされる。マスキングテープをはがした際に出てくる下地の色が図像の輪郭線になるため、完成を想定し下地の色を計画する必要がある。窓や換気扇など、壁面の絵具を塗布しない箇所にしっかりと養生を行えば、下地材を塗る工程はとにかく下地材を塗る作業であるため、子どもたちと一緒に楽しんで行うことも可能であると考えた。

2. 図像を描く工程について

一般的な壁画制作では、具体的な図像を線描で下描きをする。完成した際に線描が見えなくなるように壁面に定着しない鉛筆やチョーク、木炭などで描かれる。原寸大の下図を用意したり、壁面に碁盤目状のガイドラインを引いて、下図を正確に写し取る。アーティストがライブペイントなどで一人で壁画を描く場合は下図を決めずに即興で描かれることもある。しかし、共同作業による壁画制作で即興の下描きを行うと、色を塗る工程で多くの困難が出てきてしまう。共同作業による壁画を制作する場合は下描きをするのが一般的だろう。正確に下図を拡大し、写し取る作業は高い集中力を持続する必要があるため、子どもが参加するのは難しい。下図のデザインに子どもの絵を活かすなど、子どもは間接的な参加にならざるを得ない。

マスキング技法による壁画制作では図像をマスキングテープで描く。完成形にテープをはがした跡がそのまま生かされるので、下描きというよりは本描きである。マスキングテープで繊細な曲線を描くことは難しく、図像には直線的なテープの痕跡が表れる。そのため、滑らかで細かい図像を描くことは難しい。しかし、色や構図について考慮する必要があまりないので、大人数で落書きのように描いていくこともできる。今回の壁画制作では、この工程に子どもたちは参加しなかったが、マスキングテープの扱い方に慣れていれば、子どもでも参加可能だと考える。

3. 色を塗る工程について

一般的な壁画制作は、描く図像に合わせて色彩が選択され、下描きの輪郭線に沿って色を塗る手順で進められる。絵具を塗る道具は図像を再現しやすい筆やスプレーなどが使われやすい。

一般的な壁画制作の色を塗る工程に子どもの参加が難しい理由は、図像を描く工程と色を塗る工程を完全に分けることが難しい点にあると考える。なぜなら、色を塗る工程においても制作者は常に完成図を想定し、壁画全体のバランスを意識しなければならないからである。壁画全体のバランスを無視して色を塗ると、明度や彩度が合わず全体の図像が読み取りづらくなってしまふ。図像を描く工程と色を塗る工程を同時に進めることは専門家でも高度な技術である。そのため、構図や配色などについて綿密な計画し、図像を描く工程と色を塗る工程を可能な限り区別することで作業時の試行錯誤を少なくする。一般的な壁画制作では、図像を再現することが優先されるため、色の選択や塗り方、塗るための道具について、制限が大きくなる。また、壁画の完成度を上げるためには丁寧な作業が必要

になるため、作業に数日かかることも多い。子どもが色を塗る工程に参加するには、技術面、能力面、作業時間の面からハードルは高く、部分的な参加になってしまうと考える。

一方で、マスキング技法を応用した壁画制作は、図像を描く工程と色を塗る工程をはっきりと分けることができる。この技法による図像を描く工程はマスキングテープを貼る作業で終わるため、色を塗る工程では図像を描く必要がなく、個々の制作者が全体のバランスを見る必要もあまりない。そのため、制作者に具体的な図像を描くための専門的な技術が求められない。輪郭線の中を塗りつぶさなければならない、色を調整しなければならないなどの制限が少なくなるため、制作者は壁へ絵具を塗る行為のみに集中することができる。自分の身体より大きな壁面へ絵具を塗るという行為を頭で考えずに身体で楽しむことができるのだと考える。色を塗る道具についても図像を再現する必要がないため、指やスタンプやローラーなどのように道具の選択の幅が広がる。筆を使わないことで図像を描く意識から離れ、より塗る行為に集中することもできる。また、壁面の面積にもよるが、色を塗る工程にかかる時間は数時間である。

マスキング技法を応用した壁画制作は一般的な下図を描く壁画制作と比較し、図像を再現することにとらわれない。そのため、色や塗り方、塗るための道具について選択の自由が広がるため、大人数での子どもたちの壁画制作への参加を可能にしたと考える。子どもたちの年齢や能力の差に関わらず、それぞれの楽しみの中で壁画制作に関わることができた要因である。

4. 仕上げの工程と完成した壁画について

一般的な壁画制作の方法は、計画的に準備した下図が明瞭に壁面へ写されて完成となる。図像が明快に読み取れる、何が描かれているのか認識できるという点での完成度は高くなる。

一方、マスキング技法で描かれた壁面は、マスキングテープを剥がし完成となる。剥がすまで壁画の全体像が分からないので、テープをはがす際にはワクワク感がある。図像にとらわれない自由な色彩やタッチが表面に残るところが魅力である。図像は部分によって色彩のコントラストが弱くなり、不明瞭になる場合がある。絵具の垂れなどの偶然性や描く行為の痕跡が強調されるため、鑑賞者に描かれた図像を読み説いてもらい、メッセージを伝えたい場合には不向きな技法となる。本研究の実践のように子どもたちと楽しみながら描き、そのプロセスを壁画として残したい場合は有効な方法となりうると考える。壁画を描く場所や依頼者の要望に応じて、技法を選択する必要がある。

	一般的な壁画制作	マスキング技法を応用した壁画制作
塗る下地工程を	絵具の発色や定着が良くなる下地を選択する。養生を行えば子どもでも参加できる。	下地の色が輪郭線として完成まで活かされる。養生を行えば子どもでも参加できる。
図像を描く工程	計画的な下図を作り、壁面へ写す作業を行う。高い集中力の持続が求められるため、子どもの参加は難しい。下図の提供など、限定的な参加方法となる。	滑らかで細かい図像を描くことは難しい。大人数で即興的な描き方が可能である。子どもによる参加も可能であるとする。
色を塗る工程	図像を描く工程とはっきりとは分かれていないため、常に壁画全体を想定して作業する必要がある。色や塗り方、塗るための道具の選択について制限が大きい。また、作業日数がかかるため、子どもの参加は限定的になる。	図像を描く工程とはっきり分かれているため、図像を意識せず、絵具を塗る行為を楽しめる。作業時間は数時間であり、色や塗り方、塗るための道具の選択について、制限が少なくなる。子どもの参加が可能である。
完成した壁画	図像は明快で読み取りやすい。	図像は不明瞭な部分もあるが、壁画からは偶然性や制作者の身体の動きを感じる表面となる。

図23 一般的な壁画制作とマスキング技法を応用した壁画制作の比較

IV. まとめ

本研究では、多様な子どもたちが参加可能な屋外壁画制作の方法として、マスキング技法を応用した壁画制作の方法を実践した。一般的な壁画制作の方法とマスキング技法による壁画制作の方法を比較した結果、マスキング技法による壁画制作のほうが制作時間が短く、色を塗る工程で描き方や色、道具の選択について制限が少なくなるため、壁画制作に参加するために求められる技術的、能力的ハードルが下がることが示された。一般的な壁画制作の方法では参加できなかった年齢が低い子どもや障がいがある子どもたちでも積極的に制作に参加できる壁画制作の方法であると考えられる。

一方で、マスキング技法による壁画は描かれた図像が不明瞭になる場合が考えられた。一般的な壁画制作以上に下地を含めた色彩の調整を事前準備として行うことが重要である。また、今回はスタッフで行ったマスキングテープで図像を描く工程を子どもたち自身で行うことができれば、より「自分たちが描いた」という達成感を得られ、施設への愛着につながる壁画制作になると考える。今後の検討課題としたい。

謝辞

下地作りから壁画制作までスタッフとしてお手伝いいただいた、放課後等デイサービス「Harmony」の施設職員の皆様、天童アートロードメンバー、学生ボランティアに心から感謝します。何よりも活動を楽しんでくれた子どもたち、ありがとうございました。

註・引用文献

- 1) 放課後等デイサービスとは、学校教育法（昭和二十二年法律第二十六号）第一条に規定する学校（幼稚園及び大学を除く。）に就学している障害児につき、授業の終了後又は休業日に児童発達支援センターその他の厚生労働省令で定める施設に通わせ、生活能力の向上のために必要な訓練、社会との交流の促進その他の便宜を供与することをいう。（児童福祉法、第六条の二の二）
- 2) 一般社団法人「青葉の杜」が平成26年に天童市久野本に開所した放課後等デイサービスを行う施設である。筆者が月に1～2回、造形活動の講師を務めている。
- 3) 木野和代・岩城達也・石原茂和・出木原裕順 2006 モノへの愛着分析 対人関係とのアナログによる測定 感性工学研究論文集 Vol.6 No.2 pp.33-38.
- 4) 渋谷 清 2010 共同壁画制作における指導法の研究－〈フレスポ神辺住宅展North Garden〉での実践から－福山市立女子短期大学研究教育公開センター年報 pp.75-82.
松永拓己 2011 共同作業による絵画制作の実践 1－熊本市旧産業文化会館壁画・附属病院壁画－熊大教育実践研究 第28号 pp.121-131.

松永拓己 2014 屋外壁画制作による地域貢献－阿蘇市内牧において－熊本大学教育学部紀要 第63号 pp.249-256.

松永拓己 2015 阿蘇における壁画制作の取り組み－教材化の可能性－熊本大学教育学部紀要 第64号 pp.213-220.

松永拓己 2016 屋外壁画制作の研究－附属特別支援学校における試み－熊本大学教育学部紀要 第65号 pp.195-202.

松永拓己 2017 屋外壁画制作の研究－熊本地震復興制作－熊本大学教育学部紀要 第66号 pp.185-192.

上浦千津子 2013 岡山県立聾学校とのコラボレーションによる壁画制作プロジェクト 中国学園大学紀要 第12巻 pp.143-148

5) 横出正紀・内田裕子 2006 個性を活かした共同制作の方法について－工作的絵画を手がかりにして－熊大教育実践研究 第23号 p.139.

6) マスキングテープやマスキング液で画面を保護し、絵具を塗った後にテープをはがすことで保護部分には絵具が塗布されずに残すことができる技法である。（『保育をひらく造形表現』槇英子 p.43参考）

7) 「天童アートロードプロジェクト」は、平成24年から天童市を中心に活動している。ワークショップや展覧会の開催を通して、地域とアートの実践の中で探求している。主なメンバーは青木亮太、イシザワエリ、小野木亜美、佐々木綾子、芳賀一彰、樋口健介である（2015年）。

8) 天童市美術館で開催した「てんてん展－道草の向こう－」（期間：2015年11月15日（日）～11月29日（日））で展示した。

SUMMARY

Kensuke HIGUCHI:

A Study on Outdoor Mural Paintings Drawn by Children – Through Mural Painting in the Institution for Children with a Disability –

In this study, I practiced the method of mural painting by masking technique. The purpose of the study is to compare mural painting by general production method and mural painting by masking technique and to verify whether various children are easy to participate in mural painting production.

As a result, it was shown that children can easily participate in mural painting by masking technique rather than general mural painting method. The reason is that the time required for painting mural works is short, the restrictions on choice of drawing method, color, tool are reduced in the process of painting color. This method makes it possible for children of low age and children with disabilities who could not participate by general mural paintings actively participate in mural painting production. On the other hand, mural painting by masking technique may obscure the image. It is necessary to choose the technique of mural painting according to the place where the mural painting is drawn and the request of the client.

(Uyo Gakuen College)

